令和４年度　旧今治管内　生徒指導夏季研修会　実施報告書

１　日　　時　令和４年８月８日（月）　10:00～12:00

２　場　　所　グリンピア玉川（大ホール）

３　講演内容

・　演　題　「だれもが安心して生活できる学校にするために」～性的マイノリティの人権課題～

・　講　師　西条市立西条南中学校　岸田　英之　氏

⑴　動画視聴（学校の対応が性的マイノリティの生徒の登校を左右した例の紹介）

ア　「マリアさんの例」男の子として育てられることが苦痛であり、小学校からスカートを履いて女の子として生きていきたいと強く思っていた。２学期からスカート着用の許可は出たものの、みんなの反応が怖く、別室登校となった。

イ　「幸洋さんの例」性同一性障害であり、通称名を使っている。周りの視線が気になり登校できなかった。学校と協議し、呼び名・トイレ・更衣場所・体育の授業を配慮したり、学級の生徒と今後どう接していくか話合いをしたりした。サッカー部に所属し、生き生きと学校生活を送っている。

⑵　「性」を考えるときの４つの視点

ア　体の性（生まれたときの性別で、目に見える違い、目に見えない違いがある。）

イ　心の性（自分が自覚している性別、見た目と一致しない場合がある。）

ウ　好きになる性（恋愛する相手の性別、異性愛が優位とされてきた。）

エ　表現する性（服装や言葉遣いで自分を表現する性）

※　「男の娘（おとこのこ）」体は男性であるが、かわいい女性を装う自分に幸せを感じている。

⑶　「性的マイノリティ」LGBTQ＋

ア　「Ｌ＝レズビアン」心の性と好きになる性が女性の同性愛者

イ　「Ｇ＝ゲイ」心の性と好きになる性が男性の同性愛者

ウ　「Ｂ＝バイセクシュアル」異性も同性も好きになる人、恋愛対象となる人の性別にあまりこだわらない人

エ　「Ｔ＝トランスジェンダー」体の性と心の性が一致しないという違和感を持つ人。その中でも専門の医師による診断を受けた人を「性同一性障害」という。

オ　「Ｑ＝クエスチョニング」自分の性を探している人や自分の性を決められない人。男性・女性を決められない人。思春期に多い。

カ　「＋」これらの他にも様々なセクシュアリティがあるという意味

(ｱ) パンセクシャル（全てのセクシャルティが恋愛対象である。）

(ｲ) アクセクシャル（どのような人も恋愛対象にならない。）

(ｳ) ノンバイナリー（ジェンダーレス、性自認、性表現を男女に当てはめない。）

(ｴ) ジェンダーフルイド（心の性、性的指向が状況で変わる。）

⑷　性の多様な形（性的マイノリティの悩み・取り巻く環境）

ア　100人いれば100通りの性がある。全ての人が、自分の性について自分らしい表現で誇りを持ち、自分の望むように生きる権利がある。

イ　学校においての隠れたカリキュラムの例（整列、男女別の呼び方など）。古いカテゴリーの性別化を子どもに植え付けるべきではない。華道や茶道、看護師、保育士など男性が進出している分野もある。

ウ　性的マイノリティは11人に１人存在する。（2020年電通調査）学校の中には、必ず存在するので、そのことを頭に入れておく必要がある。

エ　トランスジェンダーの有名人も、過去にいじめや差別を受けたり、性的マイノリティの自分を隠して生活してたりしていた。

オ　差別や偏見が根強く、カミングアウトが難しくなり、本当の自分を隠して生きている。

カ　不安や心配もあり、家族も敵になるかもしれないため、自分で抱え込んでしまう。

キ　社会の環境も変化し法律の整備や学校での配慮､企業での取組が進んではいるが十分ではない。

ク　一人一人が違うから相手に興味が湧く、もっと知りたいと思う、愛おしく思う。違いがあるからこそ社会が豊かになる。

⑸　東予東中学校での取組

ア　性的マイノリティについての職員研修の実施（５月）

イ　生徒への理解を深めるための学年集会を実施（６～７月）

ウ　生徒代表による現地研修の実施（７月）、全校への報告会（９月）

エ　生徒総会での制服選択制の検討（７月）

オ　各学級での性的マイノリティについての道徳や学級活動での授業の実施（７月）

カ　人権ポスターでの地域への掲示活動（11月）

キ　学習の成果

(ｱ) 当事者への差別の現実から学び、生徒は新たな人権感覚を身に付け、学び続けようとする姿勢が見られた。

(ｲ) 新たな視点から男女別名簿や多目的トイレの不足などの改善点の発見ができた。

(ｳ) 制服の選択制を実現し、３月にスラックスを履いている女子が３名いた。

(ｴ) 性的マイノリティについて学習することで、性の価値観や多様性を認めることにつながり、互いの個性を認めることができる。その結果、マイノリティ・他者・自分に寄り添えることができ、豊かな社会を実現することができた。

(ｵ) 学校は一人一人が安心して生活することのできる場でなければならない。常に生徒一人一人に寄り添って教育活動を進めようと努めることが大切である。

⑹　質疑応答

ア　Ｑ１　性的マイノリティの児童生徒を学校側が気付くポイントは？

Ａ１　性的マイノリティは隠して生きているので、見付けるのは困難である。仕草や言葉遣いに気を付ける必要がある。周囲の理解を進め、環境を整えることが大切である。学校側は必ず存在するということを頭に入れておく。

イ　Ｑ２　性的マイノリティは先天的か後天的か？また、打ち明けられた際の対応は？

Ａ２　性的マイノリティは生まれつきで変えようのないもの。打ち明けられた際は、冷静に「それがどうした」と受け止めることが大切である。驚くのは１番ダメである。

ウ　Ｑ３　性的マイノリティの講演をした後、地域での反応はどうだったか？

Ａ３　地域で生徒が紹介した。子どもが紹介すると驚きはあったが、受け入れようとする姿勢があり、否定的な方は少なかった。

エ　Ｑ４　家庭への啓発活動をどのように行ったのか？

Ａ４　保護者向けに便りを発行したり、地域別の懇談会など保護者がいる場で話をしたりした。

オ　Ｑ５　レインボープライド愛媛の方は、お願いすると話をしてくださるのかどうか？

Ａ５　子ども対象ではなく、保護者対象なら話をすることができると伺っている。

カ　Ｑ６　性的マイノリティの学習も学年ごとの指導計画はあるか？

Ａ６　中学１年は、トランスジェンダーの学習から入るとよい。（絵本を使って学習）学年が上がるにつれて学習内容を広げていくとよい。

４　感想（講演会終了後のアンケートより一部抜粋）

○　児童・生徒が打ち明けられるような関係性や学級を築いていきたい。また身近な人と話し合うことも大切である。

○　「知らないことが差別につながる。」という冒頭の言葉が心に残った。性的マイノリティのことを正しく理解することで、正しい対応ができると思った。

○　性にとらわれず、「こうあるべき」と決めつけるのではなく、他者を尊重する心が大切であると感じた。この心を育てる機会は学校生活の中に多く存在する。生徒一人一人にこの心を育てることが教師の責務である。

○　現代では、いろいろな性を受け入れようとする意識は広がっていると思う。同和問題と同様に地道に啓発していく必要があると思う。

○　正しい情報を得ることで「違って当たり前」という感覚を身に付けることができる。学校教育の役割は大きい。

○　自分の体験にも重なる部分があり、子どもたちへの対応・指導の在り方について深く考えることができた。